

方広寺大仏殿後

1585 年、豊臣秀吉は、関白宣下を受けました。彼に先立つ多くの将軍らのように、秀吉の都での最高階層への参入後、いくつかの大規模な建築プロジェクトへとつながりました。彼は都市部の周りに壁を築き、皇居を一新し、鴨川にかかる京都で最初の石橋を作りました。しかし、秀吉の最も野心的なプロジェクトは、京都の東部郊外に新しくできた方広寺に大仏殿を建設することでした。

秀吉は、8 世紀に聖武天皇（701-756）の発願により建てられた奈良の東大寺にある大仏殿よりも大きな大仏殿を建てようと考えていました。また、秀吉は記録的な速さで作る計画を立てました。このプロジェクトは秀吉の支配を象徴するもので、聖武天皇と同様に、国家統一というメッセージを示すものでした。最初の、最も差し迫った問題は、資材と人的資源の支払い資金を調達することでした。プロセスをスピードアップするために秀吉は全国的にはたらきかけ、全国から集められた刀は溶かされ、鍛造されました。大規模な寺院の鐘を作るために銅も集められました。この時代の日記によると、秀吉がいかに労働者に報いたかについて示されています。「都の人々は、大仏の基礎を築くために石と土を詰めました。その後、彼らは食べ物と飲み物を提供され、踊りに誘われました」（『多聞院日記』）

1589 年に完成すると、大仏殿は京都の東端を支配しました。幅 90 メートル、奥行き 50 メートルで、日本でこれまでに完成したなかで最大の建物でした。訪問者は、今日、跡地を取り囲んでいる目に見える石の壁の遺跡を見ることで、当時のスケール感をつかむことができます。当時の京都の鳥瞰図に描かれた大仏殿の描写（特に舟木本の洛中洛外図）は、明るい深紅色の木材で作られた重厚で豪華なタイルでできた巨大な建物として描かれています。元の構造は 1596 年の地震で破壊されました。再建はすぐに始まりましたが、秀吉が 1598 年に亡くなったときに停止しました。徳川はこのプロジェクトに反対し、いくつかの大地震も起こりました。それにもかかわらず、今日この場所にある寺院には、鐘、いくつかの彫像、巨大な石壁など、創立期からの多くの宝物が残っています。